

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十四年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷七号（通巻第二二三号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第223号

11. 2012

ロボット

品川 鈴子

ロボットの足は棒立ち悴みて

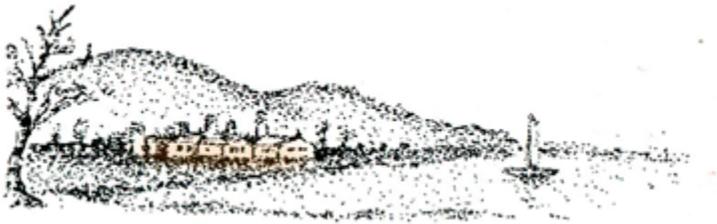
ロボットが勝ちハンカチで眼尻ふく

セーターの腕々ロボット胴上げす

優勝のロボット ビール浴びせらる



ロボットに抱擁ハグの学生着ぶくれて
底冷えに優勝ロボット胴上げす
ずわいより渡蟹欲る瀬戸育ち
痒き身を千繰り叩く長き夜
盛売りの蜜柑先づ買ふ郷の駅
飛天撒き離宮の色葉踏み憚る



玉

鈴

吟

愛媛 早川周三

大雨と思へば晴れる男梅雨
エコナビに掃除も任せ冷房機
向日葵の群がり咲けば予の迷路
寝苦しと首振りつつ放し扇風機
節電と霍乱天秤手立てなし

兵庫 林 哲夫

一族がさつと来て去る盆休み
自主稽古師匠形見の扇子持ち
單帯明治生れの祖母小柄
兒と競ふ汗疹びつしり高齢者
雷雲に翳るスタンドあと一球

兵庫 林 美智

夏休みなやみの多き親も居て
団扇手にエコエコエコとまどろみぬ
蝉しぐれ合はせてはげむ夕支度
夕立のそれて溜息続く午後
纏ひつゝ瓢箪の蔓すがれゆく

兵庫 平田恵美子

緑蔭を陣取つてより構図決む
蒲の穂の虚空に吊られぬるやうに
とうすみの糸絡ませずピオトープ
雲の峰山の峰をも際立たせ
カーテンに止めては数ふ蟬の殻

愛媛 福島松子

散歩犬はぐれ子雀追ひてみる
伊達眼鏡して惜しげなく素足出し
水しぶき子ばった四方八方へ
汗だくの兒を片腕に参観日
若旦那家事に育児にアロハシャツ

愛媛 福田かよ子

虹立ちぬ草原に降り鷺の群
足の指炎暑に跳ねるベビーカー
気まぐれな脳トレ筋トレ老の夏
帰省して木と木つなぎし兒等の服
活断層上も猛暑や吾も住む

兵庫 藤井久仁子

一望の蓮の合掌まだ解かず
悔い少しありて余生や忘草
水羊羹折目正しき母なりき
青年の会釈の涼しセー又河畔
風鈴の鳴らぬ一日や旅疲れ

兵庫 藤田かもめ

太平記ゆかりの笠置青しぐれ
天険の笠置を目指す夏帽子
薄暮れの行在所跡閑古鳥
原発と縁なき明かり夜光虫
極楽にもエデンにも蓮色違ひ

大阪 藤田京子

終戦 日戦 傷の 指眺む夫
取り込みし洗濯物より蟻蛸の子
バイクより檀家地図落つ盆の僧
日焼せし五輪選手の爪化粧
爪光る五輪選手の日焼腕

兵庫 史 あかり

泥靴を洗ふも清水山の小屋
早やばやと軒をかいて帰省の子
武装して足長蜂の巣を落とす
責任といふ重きもの夏の果
額縁の歪み正して夜の秋

兵庫 古井公代

島の宿木蔭に吊るすハンモック
羽抜鶏ノーベル作家の風貌よ
庖丁の触れるやいなや西瓜爆ぜ
浮くだけの吾の水着に浜の砂
最後^ど婆が命中させり西瓜割り

大阪 古林田鶴子

真昼時人陰もなく風も死す
夕風や潮の香濃ゆき下校みち
菜園のトマトそれぞれ味くらべ
合宿の剣士の気合ひ百日^{さるすべり}紅
鳴き疲れ蝉も静もる夕厨

兵庫 細川知子

ひやし酒女もありぬ太つ腹
端居して原生林によりかかる
榲清水飲めば妙薬二日酔ひ
熱射病かばそき声で名を告げぬ
隣より遊びに來たり茗荷の子

兵庫 細野恵久

紅葉かつ散るや輪唱ひびくなり
木の葉髪一筆箋に納まらず
新酒酌むさるやきつねを置く蔵に
そぞろ寒鉄すべらせ開封す
カリヨンの余韻重なる秋曇

愛媛 松井洋子

釣浮草いづこの姫の耳飾る
河原撫子未明の雨を知らぬごと
教室に師の似顔絵も青檸檬
石蓴干す浜の番して猫の昼
海晴れて伊予の小富士の青嶺浮く

埼玉 松木清川

秋暑し未開の古墳に誰が眠る
王音を聴きて虚しき終戦日
コンドラ(音訳)で昇る目当ては九輪草
風鈴の江戸と南部が音を競ひ
葬送はラッパの記憶敗戦忌

東京 松本アイ

七月はヒッグス粒子とパンダの子
夏帽子半分隠れて佳人めく
遺言碑寺に見付けし鷗外忌
梅雨晴れ間プチリフォームに上気嫌
万緑のトンネルぬけて何やある

愛媛 松本恒子

人の世は笑うて泣いて盆提灯
空き家の江戸風鈴の音しきり
八十路婆遠目に若しサンダラス
酌みかはずいづれが兄ぞ白緋
新盆や母に問ひたきこと数多

愛媛 三浦澄江

胸厚き原爆像は天を指す
篝火に薪投げ入れて鵜をはやす
余生とは余れる至福団扇風
自動ドアーばつたり夏のミニドレス
日照つゞきひねもす鳴れり江戸風鈴

兵庫 三枝邦光

手花火の残像しばし庭の闇
カンナ炎ゆ栖む人絶えし長屋門
揚げ船の影に恋あり遠花火
地酒屋の創業明治花カンナ
かなかなに急きたてられて宿題子

兵庫 水野範子

夕虹追ふ幼は早し銅メダル
釣月庵 要は鉢の朝な草
破れ傘伸びて自由の樹形なる
俳人の茶室に届く青林檎
夕焼を少しはづして煉瓦亭

兵庫 水野弘

鉢手入れ蜥蜴後追う鉢の下
雲走る鴉も走る秋夕焼け
夏早朝友呼ぶ鳩の高音かな
鉄線花茶室に並ぶ武骨者
尿かけパッと茅蜩飛び立てり

香川 三橋 早苗

わたつみに水母となりて浮き沈む
産休の明けしパンダに今年竹
風鈴を吊りて始まる書道展
風蘭の下は井戸端会議場
夏の雲ガッツポーズで伸び上がる

茨城 三輪 慶子

狂言師汗をとばして笑ふなり
鶴の声冷房強き能楽堂
稲の花利根川べりの直線路
こぼこぼと絶えぬ水音稲の花
青蜜柑程よき数となりにけり

埼玉 向江 醇子

生真面目に礼して急ぐ蟻の群
変る世をつくづく嘆く法師蟬
終戦忌天皇の声青い空
猛暑日や黒のスーツの面接子
夏休み隣りのピアノ上手くなる

兵庫 村田 とくみ

五月闇眼鏡のレンズすぐ汚る
回想に耽るいち日飯體えて
ランタンに一瞬目つむるなめくじら
七月尽やつと軒先蔓隠し
近寄れど蜘蛛動かざり蠅啞へ

佐賀 森田 子月

お茶乞ひてお茶のありたる家の秋
汗臭く働けたる母誕生日
雨洗ふ庭に朝顔閉じ得たり
夕空のひとまたたきに茜なり
一癖が味であるべし蜻蛉交ふ

大阪 師岡 洋子

夜店の灯ことにトルコの涙壺
鬼灯や母を語れば訛出て
ポンポンダリア母にカタカナ教はりし
汗拭ふタオルを首に音合せ
街路樹に埃八月永きこと

東京 安田 とし子

梅干して木戸のあたりに酸匂ふ
夫の忌を間近に猛暑また猛暑
少年野球の喚声とどく青簾
蝉時雨判じて読めぬ無銘の碑
空蝉を拾ひ旅路の連れとせり

香川 横内 かよこ

腕時計外し男の三尺寝
ソーダ水今もあだ名で呼び合ひぬ
惜別の花火上がりて五輪閉ず
原爆忌遠き国では五輪沸く
パラソルを差しかけられて道教へ

鈴の奏

品川鈴子選

暮れ際の振花ねぢれはじめけり 兵庫 稲山 忠利

二の丸に遺る深井戸齒朶青葉
黄槿はまぼうや由良の門波の立ち上がる

水尺の棒杭朽ちし青岬

熱帯夜バイクの爆音加はりて 兵庫 板倉眞知子

炎天の蒸気機関車大汽笛

S Lの若き機関士玉の汗

蝉眠る時折寝言放ちつつ

縁涼し手斧跡ある千年家 兵庫 荒木 稔

吞吐ダムの水叩きをり夏つばめ

顔見知り減りしふるさと稲垂るる

ふるさとの風の匂ひや稲の花

暑の底に塩田平が広がりし 兵庫 木本 彦

夕立に別所温泉騒ぐ下駄

元興寺蝉と塔跡なにもなし

猿ぼぼも日焼布にて元興寺

洗ふ墓妣こだわりし御影石 兵庫 太田 健嗣

しづきあげ雲海進む翼かな

日傘して男の歩幅広くなり

秋はじめ箸が物言うお食い初め

納戸から出て風鈴のはしやぎをり 兵庫 津田 霧笛

サイレンにふとあの怖さ終戦日

老いるとはいつも眠たき合歓の花

節電の居間の暗きに端居する

高鳴りを隠す扇の半開 兵庫 中岡佐知子

言い淀むしがらみ弾く鳳仙花

曖昧な気持片隅新酒汲む

しきたりを真直に伝え鶏頭立つ

深呼吸すだれ巻き上げ茶事本番 兵庫 前田 玲子

露地わたる銅鑼の音五打朝の茶事

香合は東大寺の破れ蓮とや

雷の音して犬の離れざる

病歴も時になつかし小鳥来る 兵庫 上田 雪夫

カンナ燃ゆナースの呉れし鎮痛剤

貝割菜ゆつくり伸びる足の爪

善人のふりは疲るる秋の暮

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 高橋 大三 //

*選句は全て 品川鈴子

水尺の棒杭朽ちし青柳

稲山 忠利

顔見知り減りしふるさと稲垂るる

荒木 稔

水尺とは出水の高さを測るため、尺度を記して水中に立てて置く標柱で、みずぐいとも言ふ。岬の鼻の辺りはしばしば大出水に見舞われるので、手取り早く身辺にころがっている棒切れやら、丸太で代用される。そのまま喉元過ぎれば草木が生い茂って、平穏な岬端の風景にもどる。

蝉眠る時折寝言放ちつつ

板倉眞知子

夕立に別所温泉騒ぐ下駄

木本 彦

昼間鳴き疲れた蝉しぐれが、ようやく声を鎮めた。家人もそれぞれ昼の暑さと仕事疲れから解放されて、ほっと一息ついて寝室に横たわるころ、庭の樹々で眠る蝉が時おり思い出したように小声を洩らす。

それを作者は蝉も夢を見て寝言を呟くのかと聞きとめた、ロマンチスト。互いに夢多い世代ぶり。

夏のある日、おりしも夕立である。信州一古い歴史をもつ別所温泉で、温泉客があわてて軒下へ雨宿りにと、ばたばたと駆けだす。その宿下駄の音が騒がしい。別所温泉は、国宝・重文級の文化財が多く、また、美人の湯としても名高く観光客も多い。外湯も四か所あり、それで、こういう場面に出会うことがあるのです。

洗ふ墓妣こたわりし御影石

太田 健嗣

お盆になり、母の墓に詣でた。花を入れ、お水をあげ、手を合わせると、きびしくも優しくかつた亡き母のあれこれを思い出す。そういえば、墓石は兵庫県名産の上質の御影石でなくちゃと、随分こたわっていたものだなあ。

納戸から出て風鈴のはしやぎをり

津田 霧笛

梅雨も明け、本格的な暑さがくる。納戸から風鈴を出して窓辺につるす。風鈴は居場所を得て、生き返ってはしゃぐように、風に泳ぎ、澄んだ涼しい音を立て続けにきかせてくれる。もちろん、風鈴がはしゃいでいるというのは、作者の胸の高まりである。

言い淀むしがらみ弾く鳳仙花

中岡佐知子

正当でも、なかなか言い出せないこともある。相手だったり、時と場合によってである。目を切ったけれど、言い淀んでしまう。ちょうど初秋で、ふと見ると庭には赤い鳳

仙花が咲いている。鳳仙花の実は熟すると弾けて黄褐色の種を飛ばすという。そうだ、思い切つて言おう。

深呼吸すだれ巻き上げ茶事本番

前田 玲子

茶会は楽しくもあり、緊張する時間でもある、特に始まる直前は。そこで、深呼吸して息を整えて、心の準備をする。すだれを巻き上げると、この夏の茶会もいよいよ本番である。

病歴も時になつかし小鳥来る

上田 雪夫

この秋も渡り鳥がやってきた。季節は確実に巡っている。長く生きていると、いろんな病気にかかった。そんな病歴も今では時になつかしく思い出す。いつたいていなることやらと心配したことや、長く入院の日々を送ったことや、見舞いに来てくれた友人との会話などなど。(以下略)